



# ICT 海外ボランティア会会報

No. 59

2015年8月23日(日)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : [info@ictov.jp](mailto:info@ictov.jp)

## 目次

◆ 特別寄稿

言葉で聞くから仕事が追う、意図で聞くから仕事を追う

ICT海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆ 技術協力の思い出

シニア海外ボランティアの勧め(自分自身の棚卸)

ICT海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆ タイでのロングステイの奨め

元NTT国際部担当部長 松山 康彦氏

◆ トンガ王室と国民

トンガSV '06~'08 村上 勝臣氏

◆ 第16回 海外情報談話会 開催模様

事務局

◆ 第17回 海外情報懇談会 開催のお知らせ

事務局

## 言葉で聞くから仕事が追う、意図で聞くから仕事を追う

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

### 【真藤 恒氏語録】

何かオーダーされたら、言葉ではなく意図で聞くことが大事である。

言葉で解釈する限りにおいては、強制されるという気持ちがどうしても本能的に出てくる。意図で解釈すれば、強制されるという気持ちは、ほとんど出てこないはずである。たとえば、上がこう言ったからと、ただオウムがえしにやる仕事は自分の仕事になっていない。上の言う意味はこういうことだなどと自分で考え、それならこういう段取りやろうというプロセスがあれば、それはもう立派な自分の仕事であり、自分が仕事を追っていることになる。

要は、その仕事が全体の中のどこに位置するのか、最終目標に向かってのプロセスとして、いまこうしようとしているのだといった具合に、仕事の位置付けをきっちと腹に据えれば、それが自分の仕事となり、自分が仕事を追っている。

宿題を出されて動くのではなく、自分で自分に宿題を出してやっていくことが一番大事である。仮に宿題をもらっても、宿題を達成するためには、そこへ到達するステップの宿題を自分自身で作らなければならない。

そうなる宿題を与えられたのではなく、自分が自分で宿題を作ったのと同じ心理状態になる。それが大事なことである。上から何も言われなくても、どんどん自分自身あるいは自分の集団に宿題を出してステップアップしていけば、権限委譲もなにもしなくても、本当の権限委譲の姿となる。

言葉だけ聞いて、無目的に、あるいは隷属根性でみながら仕事に追いかけていたら、組織全体が動かなくなってしまう。これが一番危険である。

### 【石井 孝氏のひと言】

真藤語録の特徴の一つは、社員個々の自主性の強調である。自分自身で考え、自分なりに判断して精一杯やってみる、そうすれば、責任は俺が取ってやるという心意気に溢れている。厳しい命令だけ下し、問題が起きると逃げを打つ。これでは、社員の自主性など望むべくもない。

真藤さんは、巨大タンカーの開発経験を基に、ソフト開発についてもモジュール化が可能であろうという信念が固く、常日頃それを求められた。

ソフトウェアの場合はハードとは異なり、物理的寸法や電氣的定格を合わせて置けば、モジュール相互が嵌合するというものではなかった。モジュール相互間のロジカルなインターフェイス処理や、システム全体を通した論理的整合性の確認などを考えると、残念ながらハードのようなモジュール化はうまくいかなかった。

しかしながら、既存のソフトウェアを詳細に調べてみると、サービス機能の追加・拡充などの際手を加える部分は、全体の三割強であることが分った。その部分を改造し、手を加え易いようにしておけば再利用が極めて容易になり、設計、コーディング、テストの全てがうまく行くことが分った。

真藤さんには、モジュール化は勘弁願ひ、再利用の強化で行く旨、了解を頂いた積もりであったが、その後も、何かにつけ「モジュール化はどうなった」の催促は終わることはなかったのである。

### シニア海外ボランティアの勧め（自分自身の棚卸）

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

海外ボランティア（以下SVと略記する）というシステムを知ったのは、40年近い会社勤めにピリオドを打ち、何か一区切りがついた気分になっていた平成10年10月頃の新聞記事であった。これまでのサラリーマン人生を振り返ると、ドメステックな仕事ばかりで、海外で何かをするというような機会には恵まれなかった。国と国の垣根が薄れつつある昨今、新しい世紀を生きる機会を与えられた一人として、一生の中で一度ぐらい外に出て仕事が出来ないものかと思っていた。

また、若い頃は別として、或る程度のポストを与えられてからの仕事振りを反芻すると、仕事の成果といえるものは部下や関連する周辺の人達によるもので、自分の能力によるところはどれほどのものであったのか、という思いも募るところがあった。これから人生の終盤戦を迎え、改めて自立した生き方を考えねばならぬ時、もう一度自分の能力を試し、必要とあれば何か手建てを講じなければとも思っていた。

SVに関する新聞記事を見るなり、これは打って付けの仕事ではないかと心が弾む思いであったが、同時に、健康のこと、語学の問題、すっかり沁みついた怠け癖など、不安も胸をかすめた。

SV事業は、国内ではなく海外で、それも開発途上国において、ボランティア精神をもってその国の開発に協力したいという意思のある者を支援するため、平成2年に外務省とJICAによって創められた事業である。現在、世界60ヶ国において、行政、技術、福祉など様々な分野で、年齢40歳から69歳までの500名近い数多くのシニアが、国の公的機関等に所属し、指導、助言、調査などを通して開発途上国の国造りに参加している。SV事業は、これからの高齢化社会を展望し、シニア世代に対し単に働く場を提供するだけのものではない。当事者の資質と豊富な経験を生かし、相手国の人々と深く密着した草の根レベルで真の国際貢献を可能性ならしめる極めて魅力ある優れた事業である。健康診断、英語のテスト、面接を経た後、タイ国バンコク市の郊外にある職業高等専門学校 Nawamin Industrial and Community College における電気通信関係のカリキュラムと教授方法の改善を行う技術協力案件にパスすることが出来た。

合格が決定すると、案件に関する要請事項や相手機関の状況、相手先でのカウンターパート（対応者）などについて、簡単な様式に記載されたメモが送られて来た。

このメモを読んでも、頼む側の気持は十分想像出来るが、具体的に何をやるべきなのか、そのために何を準備して行ったら良いかなどといった事については、今一つ見当がつかないのである。

これには当初、大分当惑したものであるが、実はこの曖昧なところがSV事業の一つの大きな特徴であり、且つセールスポイントである事が後で解かった。頼む側からすると、何か大きな問題がある事は分かるが、それが具体的に何であるのか、如何したら良いのかが分からないから頼んでくるのである。派遣されたSVは、亀の甲より歳の功、長年の経験をフルに生かし、言わばカオスに近い状況から基本的な問題を抽出、整理し、それらの解決方法に対する糸口を先ず見つけ出す必要がある。これは、経営

コンサルタントが企業などに頼まれ、会社の経営システムなどを改革、改善する場合と全く同様であると合点した。

最初に気づいた教育現場における技術的環境の後進性と云う点を念頭に置いて、タイにおける職業教育訓練の発祥経緯、歴史などを調べて行くと、現在抱えている問題点の輪郭やその背景が次第に明らかになって来た。また、並行して実際授業を持って現場に臨むと、更に具体的な問題点を肌で感じ取る事が出来た。

些かディテイルに亘るが、当時、職業高専が抱える問題は凡そ次のようなものであった。タイにおける職業教育の発祥は、手に職をつけるための訓練に端を発したもので、元来が地域に根付いた職業訓練活動で、ベテランの職人達が、地元の若者達の自立を助けるための職業訓練を行うとか、更に高度の技能を身に付けようとする意欲的な職人達を熟練工に育てるといったような事が、そもそもの発端である。地方のポリテクニカルカレッジと称する職業高専を訪ねると、地元の寄付による古い校舎が未だに残って居り、往時の面影をしのぶことが出来る。

1980年頃からタイ政府は、当時好調であった経済状況を背景に職業教育の近代化と全国的普及を図るべく、産業社会職業高専と銘打った職業教育機関を1県1校設置の原則の基に大量開校して来た。私が赴任した学校もその一つである。しかしながら、その後におけるバブルの破綻と、加えて、急激な技術の高度化、多様化、更にこれに伴う産業構造の変革は、新しいこれら職業高専の環境条件に激変をもたらした。

結果として、職業高専は、以下のような課題を抱えていた。

#### (1) ソフト化する技術への対応

職業高専の発祥経緯については、先に触れたように、その主たる目的は、自営業の育成と考えられる。技術系の場合で云うと、自動車やラジオ・テレビの修理と云ったハードウェアの修理技術を習得させることによって、自動車整備修理業であるとか、町の電気屋といった職業への道を開くわけである。

ところが、昨今の技術革新により、自動車やテレビなどの装置や機器類は、LSI化、パッケージ化が進み、マイクロコンピューターの普及でこれらの機能はソフトウェア化された。このため、従来のハードウェアイメージの修理は通用しにくくなって来ている。事実、これ等の修理は、メーカーに直結したディーラーに移行しているのが現実である。

このような技術の本質的トレンドを考えると、現行教程を抜本的に変える必要がある。

#### (2) 就職の多様化

前項で触れたように、複雑で高度化した技術をふんだんに盛り込んだ装置や機器類は、その製造は勿論、その修理についても、資本金と組織力のある企業の手によらざるを得ない。こういった現実を考えると、情報工学や機械工学などの技術分野を専攻する高専卒業生は、自営業というよりは、企業への就職の道を新たに開いてやる必要がある（着任して驚いた事は、大手の通信会社や大きなメーカーへの就職が皆無であった）。このためには、学校、企業双方にとってメリットがある相互の連携システムを創り、お互いに理解・協調し遭える方策を講ずる必要がある。

### (3) 教官の問題

一時代前、テレビ、ラジオや自動車等の修理方法をマスターするためには、簡単な基礎理論とある程度の応用技術を習得し、後は自己研鑽など経験を積みばよかった。教官にもこういったキャリアを持つ人が多かった。しかしながら、LSIやマイクロコンピューター、更にはインターネット等といった高度に複雑化した現在の技術を教えるには、この人達には荷が重いとわざるを得ない。このため、いきおい、大学新卒者を採用するのであるが、彼等には現場経験と教育経験が不足しているので、中々満足出来る授業が出来ない。この辺のところをどう解決するか、これもまた差し迫った問題であった。

### (4) 生徒の問題

あちこち幾つかの職業高専を訪問して分かった事であるが、職業高専には、大まかに言って、理髪であるとか溶接などといった比較的単純な技能研修を目的とした短期のコースと、情報通信のような本格的技術研修を目的とした長期コースの2種類がある。短期コースの場合は、生徒自身が自分のスキルアップを図るなどと云った明確な目標を持った年配者が主体になっているため、教室の雰囲気は極めて意欲的である。一方、本格的技術研修を目的とした長期コースの方は、中卒の子供達主体である。彼等の大部分は、一般高校に進学出来なかった、所謂セカンドクラスの子供達である。このため、一部には大変良く出来る生徒もいるが、平均的な学力レベルは低い。どのようにしたら効果的な教育訓練が施せるか、頭を悩ますところである。放っておくと、全体のレベルがダウンするばかりである。

国全体の産業、技術のレベルアップを担う中堅層を、職業高専が育成しなければならないとするなら、国は、入学の仕組みから抜本的な対策を講ずる必要があるが、このような大局的問題解決に関しては、SVには手の施しようがない。そこで、ローカル措置として、出来る子や、やる気のある子に焦点を絞り、彼等の徹底したレベルアップに重点を置かざるを得なかった。

### (5) 逼迫する予算

当時、タイは経済危機から立ち直りつつあったが、財政は極めて逼迫していた。当時、進められていた教育改革もこれに対する対応策の一環であって、職業高専の場合は、国から出来るだけ切り離し、資金を地方行政と地元からの寄付で賄わせようとしていた。

これを実行するとなると、校長に政治的手腕が求められる。ご苦勞でも、校長には何とか頑張って貰うしかなかった。掘り出された問題については、毎日のように校長とコミュニケーションの機会を持って、意識の共有化を図り、これらに対する当校としてのローカルの解決策を模索し、実行可能な具体策を作成しは、試行した。色々試みた施策の中で、機軸となった民間企業とのジョイント施策（一種のインターシップ）についてノートして置く。

タイの教育省は、On the Job Trainingの一環として、民間企業に教育訓練を委託するDVT(Dual Vocational Training)と称する職業訓練システムの開発をすすめていた。当時、このDVTシステムは開発途上にあり、一部の熱心な学校と、関心を持つ企業がお互いに話し合っただけで試行的に実施しているのが実情であった。政府も実施企業に対し、税制面等で優遇するなどといったことも検討しているようであったが、実施には至っていなかった。なお、日本企業では、トヨタ、ホンダが積極

的な協力を行っていた。トヨタの場合は、系列ディーラーのために作った教育訓練センターに職業高専生を受入れ、板金、塗装などの実習訓練を無償で引き受けていた。

電気通信に関しては、こういった事例が無かったので、先鞭をつける事にした。校長も、極めて積極的に動いてくれ、タイを代表する民間電話会社、TelecomASIA社と基本的合意を取り付けてくれた。同社は、元教育省次官を教育担当顧問に迎えるなど、教育訓練に熱心で、訓練用設備、教官等訓練環境は、非常に良く整備されている。教育担当の責任者に会い色々話をしてみると、技術的経験が豊かで、技術革新の動向についても的確に把握しており、こちらの要望も積極的に受け入れてくれた。実際に実行してみると、経費負担の問題や委託先における生徒の管理の問題など検討し解決すべき事項も多いが、メリットも大いにあることがお互いに実感出来た。

学校側から見たメリットは

(1) 企業の教育訓練施設には、技術的に最先端の実働機器が設置されているので、自ずと最新の生きた技術に触れることが出来る。また、教官陣に優秀な技術者を当てているので、ICP/IPなど学校で困難であった新しい技術に関する授業も、企業側の教官によるコース開設によって可能となった。

(2) 企業内研修の仕組みの下で生徒は教育訓練を受けるので、社会人としての躰や生活ルールなどについて、勉強出来る機会にもなった。

(3) 何と言っても、生徒を企業に売り込む大きなチャンスになった。

企業側のメリットは

(1) 企業イメージの強力なPRと社会貢献が出来る。  
トヨタの訓練センターを利用している高専の教職員は、「トヨタ車以外は車ではない」と大いにトヨタ最員の宣伝をしていた。

(2) 大卒にひけを取らぬ、最優秀な生徒や、やる気のある連中を選び取り見取りで就職勧誘出来る。

高専には、数は少ないが、家庭の事情等で大学進学を諦めざるを得なかった極めて優秀な学生が存在する。

実績は未だ十分とは云えぬが、新しい生きた技術に接した時の生徒の目の輝きを眼の当たりにしたり、就職内定を得た生徒の喜ぶ様子などを見ると、つくづくやって良かったな、と思ったものである。



写真は、第一回の委託訓練終了式後、(第一班)一同がTelecomASIA玄関で撮ったものである。

なお、こうした対策の実行は、全て校長の指示の基に、出来る限り現地の教職員が指導・実施するようにした。SVが実行する場合も、必ず校長の指示を受ける形を採るようにした。施策の実行、定着、更に施策の成長・発展を図るためには、執行権限を持つ組織のトップが、自分の発案で自らが進んで実



行するような形に持って行くことが何よりも重要であるからである。実施状況のチェックは、校長を中心にしたフォーマルな体制による他、SV（私）個人による“よろず相談窓口”のようなものをインフォーマルに開設し、これを通して皆の評判などを聴取した。また、これ等のローカルな試みが、何らかの形でタイ全国展開へ繋がらぬものかと考え、校長が主体となり、上部機関である教育省職業教育局に状況と成果をこまめに報告するようにして貰った。この事は大変な幸運を齎した。業績が高く評価され、校長は職業教育局下の全職業高等専門学校を指揮・指導するダイレクターに栄転したのである。

タイ人だけの世界に一人で入り込み、限られた短い期間の中で何かしようというのであるから、言葉の問題をはじめとし、生活習慣の違いなど毎日平坦な道程ばかりでは無かった。等身大の実力と云うものを、今更ながら思い知らされる感じでもあった。

しかし、周囲を取り巻く純朴な善意に恵まれ、何か、若返ったような清々しい2年間を過ごすことが出来た。取り分け、最後に学校と教育省で催してくれた送別会は何とも言えぬ心に沁みるものであった。現役当時、地方勤務の終わりに経験した送別会を思わず彷彿とさせられたものである。帰国後、2001年度のSV代表として天皇皇后両陛下に拝謁するという機会まで頂戴した。

たった2年間であったが、実に貴重な体験をさせて貰った。自己の利害得失等を度外視し、心を共にして協力・応援して下さった皆さん一人一人の方々に敬意を表すると共に、改めて心から感謝する次第である。

昨今、医療技術の進歩と食生活の向上によって人間の寿命が格段と長くなった。定年が来ても、残る人生はまだ、まだ先がある。自分がどれ程の者であったか、一度しっかり棚卸をやってみて、残された人生に備える事も大事であろう。

SVを経験すると、否応なしに「自分自身の棚卸」を余儀なくさせられる。ポジティブなシニアライフをスタートする「やすが」に、シニア海外ボランティアを是非ともお勧めする次第である。

## タイでのロングステイの奨め

元NTT国際部担当部長 松山 康彦

### はじめに

この稿のタイトルを奨めとしたが、後述するように、全ての人にタイでのロングステイを奨めているわけではない。タイの将来は不透明である。しかし、それでも、特定の生活様式をとる一部のリタイアラーには、魅力的な生活ができるかもしれない。私の経験がそうした人々の参考になればありがたい。

### リタイア

私が、完全リタイアしたのは、65歳の2011年6月であった。長年の会社人生を終えて寂しさを感じなかったといえば嘘になるが、同時に、これで住む場所の制約が無くなったという開放感も感じていた。そこで、タイでのロングステイを2011年12月から本格的に開始することにした。（2011年7月から9月までは事前調査で滞在した。）まだ日本でパートの仕事を続けていた家内は、2012年4月に合

流し、この時から夫婦でのタイの生活が始まった。

### なぜ、タイなのか？ - 運動、物価、頭の体操

私は、高脂血症の薬を飲んでおり、血糖値もやや高めなので、毎日適度な運動を行うことが健康管理に必須であると考えていた。そのため私は、家内とともに、趣味であるゴルフを週2回以上プレーでき、ゴルフ以外の日は、水泳やジムでの運動を日課として行える環境を望んだ。当地では先を買ってあったゴルフ場の会員権があるので、家内と2人でプレーしても、日本よりもかなり安くできる。コンドミニウムに住んでいれば、コンド内のジムやプールで、手軽に運動できる。日々の生活費は、近年上昇傾向にあるとはいえ、まだ当地のほうが少し安い。また、アルツハイマー予防には、外国語の勉強が良いと聞いていたので、2006年からタイ語の勉強を始めていた（この時点では、まだタイでのロングステイを決めていたわけではない。）そのため、看板などが読めたほか、最小限ではあるが、タイ語での会話もできるなど役に立った。

私は、スコアは90±といった具合だが、ゴルフが大好きで、生きがいの一つでもある。距離が6,400ヤード台のブルーティーからプレーしているので、パー4ではパーオンできないことが多いが、この年になってでも、わずかながら進歩している部分も感じている。

我々夫婦が、ゴルフの面白さに目覚め、ゴルフが生きがいとなったのは、1996年から2000年にかけてシンガポールに駐在していた時のことである。シンガポールは、赤道直下にあるので、年間を通じてほぼ朝7時に夜明け、夕方7時に日没となる。そこで、メンバーであったタナメラカントリークラブで、勤務後の夕方5時半過ぎから暗くなるまで夫婦でよくプレーした。前に誰もいなければ、1時間半でハーフは回れた。当時は、シンガポールのタナメラカントリークラブは、タイのレイクウッドカントリークラブとレシプロの関係にあり、いずれかのメンバーであれば、他方のコースを訪れた場合、グリーンフィーは、無料であった。

1年中涼しくなる時期のないシンガポールに比べ、バンコクでは年末はかなり涼しくなり快適にプレーできるので、レイクウッドでのプレーはシンガポール人には人気があった。2000年にシンガポールから帰国したが、タナメラでのプレーは、無料であることを見越して、レイクウッドの会員権を同年12月に購入した。タナメラの会員権を購入するには、1,000万円超必要だったが、レイクウッドの会員権購入の総費用は約150万円ですんだ。タナメラでは数回無料プレーを楽しんだが、この幸運は長く続かず、2003年のレイクウッドのオーナーチェンジの際にレシプロ制度は廃止され、当てが外れてしまった。ともあれ、こうした事情で、私はバンコクのゴルフ場の会員権を、2000年末から保有していた。

この会員権を保有していれば、レイクウッドでは年会費約2万4,000バーツを支払うことを条件に、プレーごとのグリーンフィーの支払いは夫婦とも不要になる。もしこの会員権を持っていないと、週日はゲストの場合1,380バーツ、ビジターの場合約2,300バーツのグリーンフィーの支払いが必要である。プレーには、このほかキャディーフィーとチップを払わねばならない。これは会員非会員同額であるが、合わせて1人700バーツ程度である。

これ以外にゴルフ場までの交通費もかかる。車を持たない我々は、バスを利用するなどして、交通費は極力節約して、往復200バーツ以下で済ませている。ということで、我々の場合、月10回のプレーでも、約16,000バーツで夫婦がプレーできるが、会員権を持っていないと、料金は日本の平均的なコースの料金よりもむしろ高くなる。残念ながら、レイクウッドでは現在この終身会員権の新規取得は出



来ず、期限付き会員権しか購入できない。他のクラブであれば終身会員権の購入は可能であるので別途検討されたい。

### 生活費はいくらかかる？

タイでの生活の主たる経費は家賃である。我々は 35 m<sup>2</sup> の 1 ベッドルームの狭いコンドに住んでいるが、家賃は 19,000 バーツである。以前近くのコンドに住んでいた時の家賃は 16,000 バーツで少し安かった。これに電気代、ネット接続代併せて約 2,000 バーツ、携帯電話の使用料 500 バーツ、ゴルフ以外の交通費 1,500 バーツ、月の食費は 8,000 バーツくらいだが、ホテルでの食事が安くなる会員権に年間 8,500 バーツ払っている。私たちは酒を飲まず、外食も殆どしないので、一般の方より少な目かもしれない。



月当たりの経費(年に1度の支払いは月当りに換算)			
ゴルフ	18,000 バーツ	ホテル会員権	700 バーツ
家賃	19,000 バーツ	携帯電話使用料	500 バーツ
電気代	1,500 バーツ	ゴルフ以外の交通費	1,500 バーツ
ネット接続料	700 バーツ	食費、嗜好品	8,000 バーツ
合 計			49,900 バーツ(現在のレートで約 18 万円)

これには、もちろん日本の往復の旅費や旅行に出かける際の非日常的な経費は含まれていない。これらを除けば、ゴルフを週 2 回やっても、夫婦 2 人が約 17 万円で生活できる。もし、プールやジムのないアパートであれば、1 万バーツ台前半でまずまずの物件はあるし、ゴルフの回数を少なくすれば、生活費は 15 万円以下でも十分可能であろう。要はその人の生活パターンによって、生活費は、増えもするが、減らすことも可能である。

### 騙されないようご注意

私は、タイでのロングステイを最初から考えていたわけでないが、2006 年から 2011 年まで、週 1 回、新宿にあるタイ語の学校に通っていた。タイ語はたいして上達しなかったが、タイ文字は覚えられた。ロングステイヤーの中には、英語もタイ語もできない人が相当数いる。

前にいたコンドの私の知人もそうだ。その人は、類い稀な努力で、日本語の分かるタイ人や、タイ語や英語が分かる日本人と積極的に友達になり、無事暮らしている。私も少しお手伝いした。でもこの人は例外である。もし、英語も現地語も分からなければ、頼った人が悪い人であると、騙される率は高くなる。少なくともコンドの契約書の英語くらいは読めるようであってほしい。タイ人だけでなく、日本人を騙す日本人も多い。ある在タイ日本大使館員は、『騙されて大使館に駆け込んでくる人がたいへん多い。駐在していた人は別として、私はロングステイを奨めない。』と語っていた。

また、外国人男性との結婚を望むタイ人女性は多い。それは無理ならぬことかもしれない。結婚によって、階層移動が可能になることおもあるからだ。だから日本人は、年寄でもハンサムでなくても、独身であれば近づいて来る女性は多いが、殆どの場合お金目当てであることを忘れてはならない。タイ人の奥さんをもつ日本人男性が、お金の管理を奥さんに任せていたために、貯めていたはずのお金が消えていたと嘆く例は多いようだ。

## 健康管理

バンコクには、外国人向けの私立病院がいくつかあり、日本人はそこでお世話になることが多い。これらの病院の診療水準は高く、施設も日本の病院以上に立派である。但し、診療費は、昔は当地のほうが安かったが、今では、日本と同等かそれ以上である。タイ語や英語が十分話せない人のためには、日本人の医師か、通訳付きでタイ人の医師かに診察してもらうことになる。(注：チェンマイでは医療水準はやや劣る。)

外国では、心筋梗塞や脳梗塞などの病気には、高齢者は特に気を付けなければならない。外国でいったんこれらを発症すれば、相当高額の治療費が必要となる。このようなリスクがないかどうか事前に十分チェックしておくことが望まれる。また、日頃から、気心が知れた医師と知り合っておくことが好ましい。私は、バンコクにある外国人向けの私立病院の一つ、バムルンラード病院の日本語ができる医師にお世話になっている。

私は、ある日、ちょっとした不注意で足指の動脈を閉塞させたため、その医師の采配で外科医を紹介してもらい、その部分の血管を膨らまして、血行を回復する手術を翌日に受けたのだが、技術は確かだった。ただ、費用は日本よりもやや高く、手術代、入院6日分の費用と経過観察6か月間の治療費・入院費の総額は約300万円くらいだった。但し、たまたまこれが起きたのが、日本出国後3か月以内であったので、クレジットカードの傷害保険が適用され、入院費を含め、私の負担はゼロであった。

また、ある日私はバスのステップを踏み外し額上部に怪我をした。日頃飲んでいる薬のせいで、出血が止まらず、同病院の救急センターに駆け込んだことがあった。この時も、表皮を縫合する前に、内部の血管をまず縫合してくれたので、内出血もなく、12針縫った割には、傷跡も残らずきれいに直してくれた。

これら以外のタイならではの健康リスクにはどのようなものがあるだろうか。デング熱は、日本人も発症する重症の病気の一つだ。また、重症になることは少ないが屋台などで食べたことが原因で腹痛を起こす人も多い。というわけでかかりつけの病院や、保険適用の有無などを事前に調べておくことが望ましい。

日本と同様の人間ドックも当地で受けられるが、これもやはり有名病院では日本と同等か少し高くなっている。それ以外の病院でも日本人向けに人間ドックを提供しているところもある。こちらの値段は、日本とほぼ同等かやや低めである。

## 不動産の購入

円高の時であれば、タイでコンドを購入するのは、十分意味があったと思うが今はどうであろうか。タイでは外国人は土地を所有できないので一戸建ては買えない。コンドなら買えるが、実は相続の時に困る可能性がある。コンドの名義者の被相続人が死亡し、相続者が外国人であった場合、コンドの名義を相続人に変更することは不可能なのだ。相続はできるがコンドを継続して保有していくことはできないので、売却を余儀なくさせられる。もし、相続から1年以内に売却できなければ、国に没収されてしまう。この事情を不動産屋は事前に説明しない場合が多い。今は、目抜きのスクムビット沿いでは値段もかなり割高である。私が住んでいるコンドのユニットは、35㎡で、400万バーツ(約1,500万円)以上する。タイバーツの価値が、今後どうなるかということも問題となろう。

## ビザの取得

1か月以上タイに在住する日本人は、ビザが必要である。リタイアした人は、ロングステイビザまたは年金受給者ビザのいずれかを取得する。在日タイ大使館に申請する場合には、タイ大使館のHPを参考にされたい。1人80万バーツ以上の預金残高が必要である。その他にも、英文の健康診断書や公証役場等での認証が必要など、面倒くさい。しかし、それらを揃えるのに必要な交通費があまりかからないところに住んでいる方であれば、おそらく最も安く(約6万円程度)、1年間の滞在許可が得られる。私の場合には、最初、教育ビザを日本で取得し、タイに入国後エージェントを通じてロングステイビザに切り替えた。手数料は支払わなければならなかったが、健康診断は不要だった。費用は同じくらいだった。

## おわりに

タイトルには奨めと書いたが、生活費が安く済むからという理由だけでタイにロングステイするのはリスクが多いので、お奨めしない。また、ロングステイしたとしても、帰国はいつでも可能なようにしておきたい。日本の資産を全部処分して来たという人もかなりいるが、私は、それは危険だと思う。また、近年物価はどんどん上昇している。野菜なども、残留農薬を心配してオーガニックなどを購入すれば、日本の野菜よりも高くなる。また、王様の影響力が大きいので、王様が不在になると国が混乱する可能性もなしとしない。というわけで、良くご検討のうえで、ロングステイするかしないかの決断をしていただくことをお奨めする。

(2015年5月14日)

## トンガ王室と国民

トンガSV '06~' 08 村上勝臣

### 1. はじめに

今年7月4日、トンガでツポウ6世の戴冠式が挙行され、日本から皇太子殿下ご夫妻が列席されたニュースはテレビニュースで大きく報道されました。ご夫妻はその際、JICAから派遣されている青年海外協力隊員(JOCV)シニア海外ボランティア(SV)と歓談されたニュースは経験者として印象に残りました。

私が在任中の06年ツポウ4世が他界し、その後長男のツポウ5世が2012年まで国王に就き他界して、ツポウ4世3男が継承してツポウ6世として、7月4日戴冠式が行われました。

私はトンガ王国と国民の関係について述べてみたいと思います。

### 2. ツポウ四世逝く

私が在勤した当時の王はツポウ4世で41年間トンガ王国を治め日本の皇室とも親しい間柄であると言われていた。王はガリバーのモデルとなった国だけあって、世界の王の中でもっとも体重が大だとギネスブックに登録していたようだった。トンガ国民から慕われた王だとカウンターパートのトンガ通信会社(TCC; Tonga Communications Corporation) 線路部長が教えてくれた。

晩年は病気との闘いで長くニュージーランドの病院で治療していたが2006年9月帰らぬ人となった。

### 3. 1 棺移送隊列

常夏の島の空に白い雲が湧きあがっているその下で、空港から王宮へ続く沿道に並んだ国民はひたすら車の列を待っていた。夕方四時ごろ通過すると言う情報もあったし、五時を過ぎるであろうという情報もあった。

2006年9月13日、ニューランド空軍基地から、空輸されるキングの遺体は、午後ヌクアロファ国際空港に到着し、空港で遺体引取りのセレモニーが行われ、その後、棺を載せた車が、空港から王宮に向かう事になっていた。

10Kmの沿道は隙間なく市民で埋め尽くされている筈だ。2年を越す治療後の死亡ということもあってか、待ち受ける市民の間には悲愴感は漂ってはいないように見えた。

私も指定されたダウンタウンの入り口沿道でTCC社員と共に亡きツポウ4世の棺護送車の一行を待っていた。2時間近く待った後の夕方5時過ぎ、警官の白い2台のバイクに先導された50台余りの車の列が通過した。

それは、ものの3分とたたぬ間に、空港の方から王宮のあるヌクアロファの方へ通過したのだった。この非常にあっけない通過は、長い歴史の中で、41年間君臨したキング生涯の期間にどこかで一致しているようだった。



写真1 空港から王宮間の沿道で棺を迎える市民

### 2. 2クイーン弔問

9月14日午後1時、王宮近くの駐車場に集合したTCC50名の弔問団は、両側に南国の大木が鬱蒼と茂る道路を、そぞろ歩いて王宮へ向かった。全員黒の喪服を着用しタバラをつけた姿である。

我々は質素な造りの王宮へ、近衛兵の検問を受けてから入場した。草原状の庭の真ん中に立っている、

やがて、テントの中から南太平洋を見渡させるその場所に、普段着姿のクイーンが座った。TCC代表者が弔辞を述べ、花輪を献上した。

クイーンは、トンガの一般的女性の大柄な体格とは程遠く、日本で見かける70歳の好々おばあさんといった感じだった。眼鏡をかけたクイーンはアンデルセンの童話に出てくる森に住む好々お婆さんに似ているように思えた。



写真2 クイーン弔問のため盛装したTCC社員

TCC社員が説明してくれた。「故キングは、パレード中に、飛び込みで路上に挨拶に飛び出だした、年寄り市民のお祝いを快く受け、一緒にダンスもした」と。人口10万足らずのトンガでは、王室と市民の距離は近く感じた。

## 2. 3 国民葬

9月19日午前10時半、私はTCCの社員と一緒に、パシリカ教会の交差点近くに陣を張って葬列の到着を待っていた。集った大人達は41年ぶりのイベントに見入っていた。1キロ足らずの道を葬列は午後2時半ゆっくり到着した。西洋映画で見るような厳かなキリスト協会葬が執り行われた。

トンガの平均的家族は、一家6人を超える家族構成だが、今日は子供、祖父母、幼児も含めみんな黒装束でやってきている。大人達から小学生まで、タバラをキチンと付けている。

翌朝、職場でTCC社員とキングファミリー、日本の皇室についての話をした。TCCの友人は日本の皇太子の参列に対して「ネクストエンペラーだからね」と敬意を表した。

彼は又、キングファミリーの説明をしてくれた。

「トンガの新キング(ツポウ5世)は、外交上は既に王位についている。然し戴冠式はキングファミリーの喪があけるキング死亡の109日後である。新5代目キングは独身だ。だから王位継承については問題を抱えている。トンガも王位継承は原則男系である。3代目キングが女

性だったのはどうしょうもない理由からだ。今度は王位継承については面倒な問題が発生するかも知れない。何しろ日本の場合の問題とは違い、独身だからね」。



写真3 葬儀場を警備する警察官

## 3. 暴動の発生

2006年11月16日午後暴動が発生し首都ヌクアロファの繁華街の8割が消失するという事件が勃発した。ツポウ4世の葬儀から3か月後だった。



写真4 消失したヌクアロファ繁華街

午後4時、会議は中止になり、直ちに自宅へ帰り今後JICAから連絡あるまで自宅待機をするよう指示された。

民主化要求集会は暫く前から国会議事堂近くの公園で細々と続けられていた。当日も午前中から行われていたが、暴動に発展したらしい。一見起こるべくして起こったのかもしれないが、こんな暴挙は勿論トンガ始まって以来の悲劇だと私のカウンターパートは嘆いていた。彼の説明によると選挙で選ばれ



る国会議員数の増加要求が具体的内容のようだった。トンガは王族の議員と選挙で選ばれた議員で構成される1院制である。

11月17日から1か月間の予定で非常事態が宣言され、中心街の2キロ四方は立ち入り禁止区域となり、JICA事務所もその中に含まれていた。

今回の暴動では、数十人の集会が行われていたが午後に忽ち1,000人程度に膨れ上がり暴動に発展し王族関係者が経営する企業、金持である商店、中国系の商店が攻撃の標的になったようだった。

暴動は一晩で収まったが、年末を迎えて出稼ぎの人々が帰国するクリスマスを控えて、政府はオーストラリア、ニュージーランドへ治安部隊の派遣を要請し17日150名前後の警察、軍隊が到着した。

1週間後、政府からTCCに対して通信施設の被害調査の命令が出て、私はTCC社員と焼け跡のダウンタウンへ出向き調査した。メインケーブルは幸い全部地下化してあり幸い損傷を免れていてTCC社員共々安堵した。



写真75 消失したTCC携帯電話ショップ

#### 4. おわりに

私がTCC社宅に住んで勤務した2006.4~2008.3前後からトンガにも民主化の波が押し寄せ、激動の時期だったと感じます。

民主化の暴動が発生し1週間外出禁止にも遭遇し首都ヌクアルファの中心街も燃えました。消失した通信施設の被害、復旧対策をTCC社員と汗だくで調査したのも思い出に残ります。

ツポウ4世は、親日家で算盤普及のため、或は相撲指導JOCV派遣をJICAへ要請し、自身多くの力士を日本へ送り込んだ王として記憶に深い国王でした。また横綱武蔵丸の父親はトンガ人で彼の実家は在留日本人が必ず訪れます。

## 第17海外情報談話会開催模様

### 事務局

標記談話会は去る7月31日(金)に、何時も無料でお借りしている五反田のJTEC会議室において開催されました。講師は日本棋院常務理事真崎秀介氏で、話題は「囲碁の効用と日本棋院の取り組み」でした。真崎様はNTT在職中には持株会社国際室や、タイ、インドネシア、中国も活躍なされるなど国際派でしたが、突如日本棋院に転出された切っ掛けを皮切り、数々の興味深いご講話は好評で、講演後の意見交換の盛んでした。26名の参加でした。講演概要は次のようです。





まず囲碁の効用として、囲碁は認知症予防になる。それは人間の脳は左脳で計算や暗記、右脳で空間認識を行っていると言われていたのですが、左脳右脳をバランスよく使うことが大切なのですが、左脳に偏っている人が多い。このバランスが崩れていることがボケる原因の一つで囲碁は右脳を使うゲームです。特に序盤から中盤は、計算能力よりも空間認識能力を使います。また、囲碁は日本の伝統文化への理解、礼儀作法の修得、集中力が身につくなど子供の学業成績とも相関関係があると言われています。

次に日本棋院の囲碁普及の現状を紹介がありました。日本棋院は昨年、創立90周年を迎えましたが、100周年を目指した「ビジョン」を策定しました。その将来の取り組みとして、囲碁人口の増大（500万人に）、より多くの世界で勝てる棋士の育成、日本棋院会員を10万人とし、地域対抗や実業団が加わる囲碁コンGRESの創設、ネット会員は子供からお年寄りまで10万人以上に、地方の普及盛り上げと地域の活性化の寄与等

です。そして、東京オリンピックの際に日本伝統文化として、囲碁を世界に発信していく等の意気込みです。



また、諸外国の囲碁の普及状況についても紹介がありました。

## ◆ 第18回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催 ICT 海外ボランティア会  
協賛 情報通信国際交流会

第18回海外情報懇談会を以下により開催いたします。

参加をお待ちいたしております。

日時： 平成27年9月18日（金） 午後3時～5時

場所： **JTEC**（海外通信・放送コンサルティング協力）  
（五反田駅下車徒歩5分、道順はJTECのホームページをご覧ください）

話題： 「ソフトウェアざっくばらんーソフトウェア 掛け声だけがコダマするー」

講師： ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

講演概要： かつて交換機は、製造会社にハード、ソフト共、全面的に依存し修復に当たっていた。

初代社長真藤氏はこのことを憂慮し、社内に事業の根幹を支えるソフトウェアについては自社で内製出来る部隊を創設することを決断した。講演者は、この部隊を立ち上げ、軌道に乗せる仕事を任された。そして「IP ネットワークによるソフト分散開発体制」および「システムの集中メンテナンス体制」を実施して格段の効率化を図り成功した。

このプロジェクトを通して得られたソフトウェアに対する基本的認識としては、コンピュータや開発技法は年々進歩し、新しい道具立てをフルに活用出来るメリットがり、また、全ては人次第でやり甲斐を共有出来る職場風土が必要である。

21 世紀の社会はコンピュータネットワークによって機能し、コンピュータネットワークを通して新たなカルチャーが創造される時代といえよう。それで夫々の立場で「新視点・新思考・新行動」の挑戦が問われている。この種の地道な取り組みは、単に自社のためだけのものではなく、国益に繋がるものであり、公益企業の責務であると自負すべきである。

参 加：入場無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 [info@ictov.jp](mailto:info@ictov.jp) までご一報下さい。

### 会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆([kato2415@jasmine.ocn.ne.jp](mailto:kato2415@jasmine.ocn.ne.jp))、または

村上勝臣([katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp](mailto:katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp))までお寄せ下さい。

### 編集後記

・松山さんより「タイでのロングステイの奨め」のご寄稿をいただきました。最近タイからの観光客も急増し、同時に日本でリタイヤされた方でタイでのロングステイを希望される方々も増加しているとのこと。松山さんのご経験からの手記はそれらの方々へ情報を提供するとともに、中進国入りを果たしたタイの一般には知られていない近況を知る上でも貴重な報告かと思えます。

・今回の「技術協力の思い出」は、石井さんによる「シニアボランティアの勧め」です。これにはタイで大きな成果を挙げられたご活躍振りが紹介されています。帰国後その活躍振りを天皇陛下・皇后陛下に報告されたとのこと。また特に会社をリタイヤされた方にも是非一読いただき、今後の生き甲斐作りに役立てていただければと思います。貴重なアドバイスでもあります。今年秋の JICA の秋募集は 10 月 1 日より 11 月 2 日まで行われます。

・村上さんから、かつてシニア海外ボランティアとして活躍されたトンガの王室と国民の寄稿をいただきました。わが国から遠く離れた島国でのグローバル化時代における国民と国王との微妙な関係は興味を引きます。

(以上 加藤)

・石井さんの「真藤語録」は権限移譲の際の、オーダーを受ける際オーダー側の「意」を汲んで実行する重要さの話題でした。ソフトのモジュール化を求めた真藤さんと、ソフトに明るい石井さんのやり取りは興味深く印象に残りました。

・石井さんの「SVの勧め」は自分の経験を具体的に紹介していました。SV経験者として非常に参考になりました。SVは派遣先職場の現状を把握して自分の経験を活かして派遣先に貢献するかは相手と常に意見交流が必要と思います。私も経験者として、皆さんにSV経験をお勧めする次第です。

(以上 村上)

総編集長：ICT海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆  
編集長：ICT海外ボランティア会 広報部長 村上勝臣  
報道部長：ICT海外ボランティア会 報道部長 山崎義行  
発行：ICT海外ボランティア会 (メール：[info@ictov.jp](mailto:info@ictov.jp))